

被災者の力になりたい

福島・浪江出身の近藤さん(新居浜)

原発事故家族ら避難

東日本大震災後に紆余(うよ)曲折を経て、被災者支援や防災を今後の人生のテーマに決めた女性がいる。東京電力福島第1原発近くの福島県浪江町出身で、ケアマネジャーの近藤由喜子さん(60)は新居浜市宇高町3丁目。40代で入学した通信制の大学を震災の影響で中退した後、2022年に再入学して被災者支援制度などを学んだ。16年かけ、今月下旬に卒業予定で「少しでも力になりたい」と誓う。

東日本
大震災
14年

近藤さんは結婚を機に1998年、新居浜市に移り住んだ。2009年4月、社会福祉士の資格取得を目指し日本福祉大(愛知県)通信教育部に入学。「高卒で就職し、大学進学に憧れていた」とも言う。子育てや仕事をしながら平日2時間、週末は4時間勉強。忙しいながらも充実した日々を送っていた。それが一変したのは11年3月11日。東日本大震災で、浪江町は震度6強を観測。翌日、実家から約4キロの距離にある福島第1原発で炉心溶融(メルトダウン)が起きた。放射線による規制の影響で生まれ育った家に立ち入れなくなった。親戚が原発に勤務し、自身も就職試験を受けるなど身近な存在で「子どもの頃から安全だと習っていた」と振り返る。家族や親戚が心配で寝られず「大学のことは何も考

通信大学で支援制度学ぶ



福島県浪江町の実家から持ち帰ったアルバムを見つめる近藤由喜子さん(11日午後、新居浜市)

えられなかった」と同年3月末で中退。市内の自宅に実家から避難してきた両親を迎え入れた。両親は1年ほどして実家から離れた福島県いわき市に住まいを移

したが、母のがんが判明。介護のため2カ月に1度、片道8時間半かけて訪問する生活を母が亡くなるまで2年間続けた。震災後、浪江町も数回訪

ねた。当初は防護服着用を求められ、徐々に規制は緩和されたものの、何度訪れても笑顔あふれる町だった地元は閑散とし「時が止まっていた」。当時、何もできなかった後悔もあり「被災者のために今、自分ができることは何だろう」との思いが湧き上がった。生活が落ち着いたら22年4月、大学に再入学すると、罹災(りさい)証明書の申請手続きや被災者が受けられる支援制度などについての授業を受講。「かなり複雑な内容で、知られていない制度も多い」と感じたという。14年には防災士の資格も取得した。

(高岡泰聖)